

かれら、
アトランティスより
光瀬 龍



ら、アトランティスより
光瀬 龍

立風書房

かれら、アトランティスより



1979年9月5日 第1刷発行

かれら、アトランティスより

著者 光瀬 龍

発行者 下野 博

発行所 株式会社立風書房

東京都品川区東五反田三―六一八 二一四一

電話 東京(四四七) 一一九一(代表)

振替 東京五―七四四九三

印刷所 壮光舎印刷株式会社／株式会社美術版画社

(乱丁本・落丁本はお取替えいたします) 〇〇九三―R六六四八―八九〇九

©PYŪ MITSUSE printed in Japan 1979

無断複製(コピー)を禁ず。

¥850.-

かれら、アトランティスより

カバー・デザイン 北澤敏彦
カバー・イラスト 角田純男
本文イラスト 萩尾望都

I

おだやかな風が、羽毛のようにほほをなぶる。

その風に、桜の花びらが吹雪のように舞った。石だたみも、雪のように花びらでおおわれている。もう桜も終りだった。

春休みは今日まで。そして日曜日だ。

上野公園は人でいっぱいだった。

坂を上ってきた人たちや、植えこみの間の歩道をたどってきた人たちは広場に集り、そこで三つの方向にわかれる。博物館へ向かう人たち。美術館へ向かう人たち、そして動物園へ行く人たちだ。

動物園へ向かう流れは、おとなよりも子供の数の方が圧倒的に多い。一人のおとなが、三人ぐらいの子供をつれているからだ。おもちゃ箱をひっくりがえしたように色彩に富み、ほほえましく、そうぞうしい。

美術館へ向かう人たちは、たいてい若い二人づれか、個性的な服装をした芸術家らしい青年、ベレ1をかぶった上品な老紳士、それに中学や高校の美術クラブらしい連中などであった。

博物館へ向かうのは、どういうわけか学生服の中学生の集団が目立つ。白いバスケット・シューズに肩の魔法びんは、遠足のスタイルなのだろうか。引率の先生がいるわけでもないのに、妙に生真面目な顔をして、ならんで歩いていたりする。

「この子たちも国立博物館へ行くのかね？」

啓子がささやいた。

「あたしたち、つきそいのおねえさんみたいじゃないの。少し離れて歩きましょうよ」

純は啓子のうでをおさえ、足の運びをゆるめた。

「つきそいのおねえさんならいいけど、中学生だと思われるわ」啓子が肩をすくめた。「ほんとうはそう言いたいんでしょう」

「あら。あたし、そこまで考えなかったわよ」

純はあわてた。

「いいって。いいって」

啓子は、桜の花びらを吸いこむような大きな口をあけて笑った。

二人ともこの四月から高校三年生だが、啓子は小がらだった。まさか中学生ほどではないが、クラスでは背の低い方から三番目だった。純とならぶと肩までとどかなかった。

芝生の中の大きな噴水が、銀色の水しぶきを放っていた。

中学生の一人は、そのあたりから右へおれていった。その方向には科学博物館がある。

「どうも、エーゲ文明には縁がなさそうだと思ったよ」

芝生のむこうに、国立博物館の壮麗な建物が迫ってきた。その鉄柵の上に、横に長く看板が出ている。

〈エーゲ文明展覧会〉

二人の足はしげんに速くなった。

「あ、来ているわ」

啓子が手を上げた。

正門のわきの入場券売場のそばに、同級生の片貝慈かたがいしげの姿が見えた。

慈も二人を見つけたらしい。かたわらに立っている友人らしい青年に何か言っている。

「やっぱり、つれて来たわね」

啓子のほほに血が上り、目がきらきらかがやいている。

ほんとうは、来てくれたわね。と言いたいところだろう。

啓子は慈が好きだった。無責任に純がけしかけたせいもあり、啓子は思いきって慈をこの展覧会にさそったのだった。そのとき、慈はいがいにあつさりと承諾し、友だちを一人ともなつてゆくと言ったのだ。

啓子にしてみれば、その友だちなぞはどうでもよい。

「やっぱりつれて来たわね」というせりふは、照れかくしだ。

「へえ。片貝さん。誠実なところあんのね」

少しいやみつたらしく言った。

「そうよ。まあ、焼かない。焼かない」

啓子は、はしゃいでいた。

「おれの同級生の北見啓子さんと三沢純さん。こいつはおれの中学の同級生で、鳥海清二とりうみせいじだ」
「よろしく」

運動部のレギュラーでもあるのか、背が高く、おそろしく陽に灼^やけている。眉^{まゆ}が濃く、笑うと白い歯がさわやかだった。

「三沢純です」

さわやかな笑いを向けられて、純は無意識にかたくなっていた。

入場券を買って、建物の入口へ向かう。しぜんに慈と啓子、清二と純がならぶことになった。

「高校はどこですか」

「港町商業」

下町にある歴史の古い商業高校だった。

「おれの家は漬物^{つけもの}屋でね。おれも学校を卒業したら漬物作りさ」

「漬物？」

「たくあんとか、唐辛子漬^{とうがらしづけ}、白菜漬^{はくさいづけ}なんか作っているんだ。工場が八王子の方にあってね、日曜日はおれも樽^{もろ}を洗ったり、袋づめをさせられたり、こき使われているんだよ」

「……」

とくに何を専門に学びたいというわけでもないのに、自分も、周囲も、なんとなく大学進学ときめて、これから高三の進学コースの一年間をむかえようとしている純には、鳥海清二の住んでいる世界は想像もつかないものだった。

えらいな、と思いながら、大学へも進まないで、さびしくないのかしらと思った。

「あたし、漬物好きよ」

本気でそう言ったのだが、なんだかなぐさめたようなひびきになってしまった。

だが、清二はそんなことは少しも気にしていないようだった。

新聞や週刊誌で広く宣伝されたせい、館内はざわめいていた。ここも中学生や高校生のグループが多く、かれらのかん高い声が、高い天井にこだましていた。

「片貝さんや啓子ちゃんには社会科が好きでね。とくに古代史に興味があるんですって。あたしは啓子ちゃんのお供」

「おれはアトランティスに興味があつてね」

「失われた大陸ね」

「ああ。これまで大西洋にあつたといわれていたんだが、最近、エーゲ海にあつたんじゃないかという説が有力になってね。その説ではクレタ島も、そのアトランティス王国の一部だったというわけさ。それで、おれ、この展覧会へ来てみたくなつたんだ」

清二は期待に満ちた目を展示室に投げた。

純は、なんとなく漬物とアトランティスの結びつきがおかしく、楽しくなつた。だが、ふと気づいてさびしくなつた。

片貝慈や啓子は、古代史が好きだし、鳥海清二は、アトランティスについて知識をむさぼろうとしている。自分だけが、はっきりした目的もなしにここへ来ているのだった。純は自分だけがのけ者になつたような気がした。うでを組まんばかりに寄りそつて、うれしそうに慈と話している啓子が、ひどく恨めしくなつて来た。純のことなど忘れてしまったかのように、第一室、と書かれた展示室へ吸いこまれてゆく。その二人とも無縁な顔で、清二は^{おまた}大股に入つてゆく。純は妙にみじめな気持で、清二のうしろからついていった。

壁に沿つた展示棚に、たくさんの土器や柱の破片、復元された壁画などが飾られている。それらの

前で、中学生や高校生がメモをとったり、手にした参考書とくらべて見たりしている。

地中海の美しい写真がかかされている。しぜんのままのカラー写真なのだろうか、と思われるほど、海が青い。濃い染料を溶かしこんだようだ。

「ああ。行ってみたいなあ」

ひきこまれるように見つめていたが、そのうちに、はっと気がついた。もう清二の姿はどこにも見えない。あわててあとを追う。

清二は第二室のガラス戸棚にへばりついていた。

「なんだ。こんな所にいたのね。どこへ行ったのかと思ってさがしたわ」

純の言葉も耳に入らないらしく、へんじもしない。

しばらくそのガラス戸棚の前につつ立っていたが、やがて、だまってつぎの戸棚の前へ移ってゆく。純はついていった。第二室から第三室へ移動する。清二はあいかわらず無言だった。戸棚から戸棚へ視線を移すときも、周囲には目もくれない。

純はふたこと、みこと、声をかけたが、完全に黙殺されている。

——ふん！ 失礼ね。そんなに好きなら、一人で見ればいいんだわ。

純はぶいとその場を離れた。

誰の存在にもわずらわされず、一人になって展示物を見はじめると、いがいに面白^{おもしろ}い。説明文も頭に入ってくる。

イギリスの地質学者であり、考古学者でもあるアーサー・エバンスは、一八九三年、アテネのある古物商の店先で、象形文字らしいものが彫られた印象石を見つけた。エバンスは店

の者に、その出所をたずねたところ、それはクレタ島で出土したことを知った。翌一八九四年、エバンスはクレタ島へわたり、クノッソスの遺跡の一部を地主から買いあげた。一九〇〇年、クレタ島がイギリスその他の国に管理されるようになる、エバンスはただちに発掘をはじめ、間もなく、二四〇〇〇平方メートルにもおよぶ宮殿の遺跡が発見された。これが、クノッソス宮殿である。

説明文のパネルの下にクレタ島のパノラマ模型が置かれていた。そのとなりには、掘り出されたクノッソス宮殿の、くわしい見取図が描かれていた。

頭が鷲で、体がライオンの怪獣グリフィンの大きな壁画がある。

グリフィンは、クレタの王の権威を象徴するものといわれている。鷲の部分が、宗教的権威、ライオンの部分が、俗世の権威をあらわしたと考えられている。この壁画は、クノッソス宮殿の玉座の背後の壁に描かれていたものの模写である。

つぎの展示室には、美しいフレスコ画が飾られている。どれも発掘されたときは、こまかく砕けていたとみえ、無数の破片をたんねんに組み合わせて復元してある。酒壺をささげた若い女や、魚を両手に持った老漁師などがいきいきと表現されていた。

フレスコ画とは、よく乾いていないしつこい面に、水に溶かした顔料で画をかいいたもので、しつこいが乾燥するとかたくなり、画も色があせたりはげ落ちたりしないので、つやのある美しい画面になる。

地中海の色あざやかな空と海が、そのような美しい絵画を作り出したのだろうか。純はあかず、その画を見つめた。三千四百年もの歳月をへているにもかかわらず、陶土の板に描かれた画は、きのう描かれたもののように美しい色調をたたえていた。

純は来てよかったと思った。

じゅん環する見学コースの、おそらくそこがさいごの展示室であろう。今までとはちがったあかるい室内に、中学生や高校生の声が充滿していた。

このへやだけ、入口に大きな立看板が出ている。

△アトランティス大陸とエーゲ文明▽

中学生や高校生の参観者は、これまでとはちがった目の色で、へやへ吸いこまれてゆく。沈静した古美術の世界から、急に謎と空想の世界へ放たれてゆくような期待が、かれらの表情にあらわれていた。

純も魅かれるように室内に足を踏み入れた。

△サントリニ島と消えたアトランティス▽

△アトランティスはどこにあったか？▽

△クレタ島とアトランティス▽

などと書かれた説明パネルが目にとびこんできた。

ギリシャとクレタ島、ロードス島、トルコの西海岸に囲まれたほぼ長方形のエーゲ海。このエーゲ海は、一名多島海といわれるほど、大小無数の島々が散在している。そのエーゲ海の南の端、キクラデス諸島とクレタ島との間に、サントリニ島と呼ばれる小さな島がある。この島は、接してある他の二つの小島とともにほぼ円形を形作っている。それは実は巨大なカルデラであり、およそ紀元前一四

〇〇年前、そこでおこった火山爆発史上、比類ない大噴火のあとを示している。そのカルデラの直径は一〇キロメートルもあり、きり立った絶壁の高さは、二〇〇メートル。それがそのまま二〇〇メートルの深さの海底までつづいているという。

そのサントリニ島では、むかしの遺跡がたくさん掘り出されている。壺やフレスコ画や、その他のさまざまな出土品は、クレタ島から出土したものと、とてもよく似ている。それは、ギリシャ文明がおこるはるか以前に、エーゲ海の周辺に極めて高い文明が存在していたことを示している。それはおそらく、紀元前三〇〇〇年ごろにはじまり、紀元前一四〇〇年ごろ、とつぜん、破滅的に終りをつげた。その理由は、長い間、謎とされてきた。

純の目は、いそがしく説明パネルの文字をたどっていった。

2

古代ギリシャの哲学者プラトンは、哲学だけでなく、地理や天文、数学などにも、極めて知識が深い大学者だった。あちこち旅行をしては見聞をひろめ、自分の学問を積み重ね、思索の糧かじとしていた。あるとき、プラトンは、王や大臣たちはもちろん、学問のなからまたちからでさえ、すっかり忘れさられてしまっているある歴史的事件の存在に気がついた。

それはプラトンの生きている時代をさかのぼること一七〇〇年ものむかし、東地中海一帯に、すば

らしい文明が存在し、偉大な王が統べる豊かな王国が栄えていたという事実であり、それが、あるとき、とつぜん海底に沈み、一夜にして王国が失われたという事件だった。

プラトンは収集した伝説や資料の中から、おぼろに浮かび上がってくる失われた王国について、確信と哀惜に満ちた筆をとった。

『これはアイギュプトスの神官たちによって語られ、ソロンによってこの地にもたらされた伝説である……』

と語り出すプラトンの口調は沈痛である。

かれは『クリティアス』と『ティマイオス』の二つの著作の中で、アトランティスについてふれている。

紀元前五九〇年ごろ、エジプトへ旅したギリシャの七賢人の一人、ソロンがエジプトのサイスの神官から聞いた話という形で記されているが、おそらく、プラトン自身の見聞であろう。

それによると、

海神ポセイドンの子、アトラスがはじめてこの国の王となり、自分の名をとって国の名をアトランティスと名づけた。

アトランティスは、代々アトラス王家によって支配され、地中海全域から大西洋の海岸にわたる広大な土地をおさめて、おおいに栄えた。支配下の諸国や属領から莫大な財宝や物資がアトランティス本国に運ばれた。また王国自体も、金、銀や大理石、それに家畜や農作物、果実などを豊富に産し、人々もみな富み、豊かな生活を送っていた。

アトランティス王国は、円形の島からなり、中央の神殿のある丘を三本の環状の水路と、三本の環状の陸地が、整然ととりまいていた。中央の島や、環状の陸地は石べいで囲まれ、この石べいには銅

板やオリハルコンの箔が貼られていた。

中央のアクロポリスには、ポセイダンの神殿や歴代の王やその妻たちの神殿がならび、いずれも、金や銀、オリハルコン、象牙、大理石などで、目もくらむばかりに飾りつけられていた。

泉にはつねに清い水が豊富にわき、たくさんのプールが設けられ、体育競技場や戦車競技場などもあった。

王国は背後に、東西三〇〇〇スタジオン（約五三〇キロメートル）、南北二〇〇〇スタジオン（約三五〇キロメートル）の長方形の沃野をひかえ、そこにも運河が縦横に設けられ、運河と運河の間は、さらに小さな水路によって結ばれていた。

港には世界各地からやってきた船がひしめき、ドックには三段櫓の戦闘艦がいっぱいに繋がれていた。王国はつねに一万台の戦車と、一二〇〇隻もの軍船を持ち、その武威は他のどの国もかなわなかった。

歴代の王たちは、みなすぐれた人格の持ち主であり、善政を敷いたが、王国の長い繁栄のうちに、王も、かれの臣民たちも、しだいに墮落していった。やがて、それが天上の神々の目にふれることとなった。ある日ゼウスは神々を呼び集め、アトランティス王国に罰を下すことを告げた。

かくて、アトランティスは火と水によって破壊しつくされ、永遠に海の底に沈められた。

ギリシャ以前の地中海文明の栄光と没落について、プラトンはこう記し、深い謎をもってしめくくっている。

長い間、アトランティス王国は、プラトンの創作と考えられ、類似の事件の拡大的伝説として解釈されてきた。

だが、何人かの人々は、アトランティス大陸を、かつて実在した大陸あるいは島と考え、大西洋のアゾレス諸島やカナリー諸島、あるいはサーガッソー海やヘルゴランド島にその場所を求めて調査を進めていった。

プラトンの記述の中に、アトランティスは『ヘラクレスの柱』の外にある、とあり、この『ヘラクレスの柱』というのが、ジブラルタル海峡をさしているのだと考えられたことから、アトランティス大陸を大西洋のどこかに求めたのだった。海峡の町ジブラルタルの背後にそびえる絶壁の大岩盤を、『ヘラクレスの柱』と呼んだのは、ギリシャ以来のことだった。それにアトランティックオーシャンという名前に、アトランティス大陸の存在の記憶や影響がありはしないか、人々がそう思ったのもむりはない。

ところが、最近になって、エーゲ海の一火山島サントリニ島が、かつてのアトランティス大陸——それを大陸と呼んでいいかどうかは別として——の名残ではあるまいか、と説く人々があらわれた。サントリニから発掘される多くの土器やフレスコ画の破片は、クレタ島出土のものと酷似しており、極めて高い文化的水準を示していた。紀元前一四〇〇年ごろと考えられるサントリニ島の大爆発は、まさしくアトランティス王国の滅亡の時期とひとしかった。サントリニ島は、にわかに注目をあびた。サントリニ火山は、アトランティス王国だけでなく、ミノア文明として知られるクレタ島、また、今はその痕跡さえ知られていない東地中海の多くの都市と文明をも巻きぞえにして、エーゲ海の海中深く姿を没したのであらう。

説明のパネル板は、アトランティス王国とサントリニ島の関係を、なお謎としながらも、何分かの確信を秘めてそう結んでいた。